GCOE ワーキングペーパー
次世代研究　52

子育て支援サークルにおける母親どうしの付き合い

― 母親たちへのインタビューを中心に ―

戸江 哲理
（日本学術振興会特別研究員 / 奈良女子大学文学部）

2011 年 8 月

京都大学グローバル COE
「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」
Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501　京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科
Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp　URL: http://www.gcoe-intimacy.jp/

1　はじめに

改めて確認するまでもなく，子育て支援は現代日本社会が直面する喫緊の課題のひとつだと考えられている．そして子育て支援が必要とされる社会的背景に，母親の「育児不安」（牧野 1982）があることもくり返し確認されてきた（池田 2009）．専業主婦として家庭で子どもを育てる母親がとくに大きな精神的・肉体的負担を抱えていることや，育児不安が延いては児童虐待へと進展する危険性もあることが指摘されてきた．そして，この育児不安を低減・解消させるひとつの鍵として注目されてきたのが，「育児ネットワーク」（落合 1989, 1993）である．育児ネットワークの議論は，子育てが母親という単独の担い手だけで支えられているものではなく，家族（夫・子ども）・親族（実父・実母・義父・義母）・友達（出身学校・職場・子ども関係）・地域社会（近隣住民）・公的サーヴィス（保育所・幼稚園・子育て支援サーヴィス）といった多様なアクターによって支えられているものとして捉え直していった．つまり，母親が育児を抱え込むことの危険性に警鐘を鳴らすと同時に，多様なアクターによる育児サポートの重要性への視角を切り開いたのである．

かくして育児不安の諸研究と育児ネットワークの諸研究は，子育てをめぐる諸問題を母親へと帰責させる「母子パースペクティブ」（山根 2000: 26-8）から，母子が置かれた社会的環境へと目を向けさせるという転換を牽引してきた．子育て支援の必要性は，この転換の論理的必然とも言うべきものであった．

本稿が調査対象とする「子育て支援サークル」もまた，この育児ネットワークの一端を形成する母親どうしの「つながり」（本稿では，つながり・「付き合い」・「ネットワーク」・「関係」という表現をコンテクストに合わせて互換的に用いる）を作り上げる場という側面をもっている．子育て支援サークルとは端的に言って，主として 0 歳から 3 歳までの乳幼児をもつ親（主として母親）があつまる場所である．この場所で母親たちは，他の母親やスタッフと話をしたり，子どもを他の子どもと遊ばせたり，イベントや講座に参加したりする．

4.1 節でも少し述べるが，現在多くの子育て支援サークルが政府から「つどいの広場」として援助を受けている [1)]．「つどいの広場」設立主旨について，厚生労働省はウェブサイトで次のように説明している．はじめに現状把握が述べられる．つまり，「近年の少子化，核家族化の進行に伴う家族形態の変化や，都市化の進展に伴う近隣との人間関係の希薄化」によって家庭・地域の子育て支援が弱体化し，結果として親たちが「『密室育児』による孤立感，閉塞感をもたらし，子育てへの不安や精神的負担感を増大」させている．したがって，親たちが「気軽に集い，うち解けた雰囲気の中で語り合うことで，精神的な安心感をもたらし，問題解決への糸口となる機会を提供することが必要である」．「つどいの広場」はこのような場として構想された [2)]．以上から，子育て支援サークル・「つどいの広場」は，母親たちの付き合いの端緒や，これを維持・進展させるチャンスを提供することを明確に企図していることが分かる．

2　問題の所在

だが，ここで次のような疑念が頭を擡げる．母親たちにとって，他の母親たちとつながること，とくに深い付き合いをすることが常に望ましいといえるか．むしろ，つながりがかえって苦痛・負担を生む場合もあるのではないか．端的に言えば，つながりが「しがらみ」へと転化する場合もあるのではないか．以上のような疑念である．卑近な例となるが，「公園デビュー」という言葉は，このジレンマを上手く表現しているように思える．またじっさい，この点に注目した研究も少しずつ出はじめている（住田・溝田 2000; 松田 2001; 前田 2004a; 落合 2004; 松田 2008）．

これらの研究のなかでも松田（2001, 2008）は，本格的なネットワーク分析を育児ネットワークに導入したものとして近年呼び声が高い．従来の計量的な育児ネットワーク研究では，ネットワークの規模（たとえば何名の育児サポートの担い手がいるか）・構成（たとえば育児サポートの担い手が親族か非親族か）などが重要なファクターとして注目されてきた．これに対して松田（2001, 2008）は，ネットワークの密度（端的に言うなら，育児サポートの担い手どうしの関係）を分析に組み込む．結果として松田（2008: 99）は，ネットワークの密度が育児不安・育児満足に対して「カーブの効果」をもつという知見を得る．つまりネットワークの密度は，小さい場合や大きい場合に比べて，中程度の場合に効果を発揮するというのである（松田 2008: 96-7, 103-6）．この密度が「疎すぎず，かといって緊密すぎない，ほどほど＝中庸な状態」（松田 2008: 163）のネットワークを，松田（2008: 162）は「中庸なネットワーク」と呼ぶ．松田（2001, 2008）は，ネットワークが稠密過ぎる場合，かえって育児不安を助長し，育児満足を減退させる可能性を示唆した点で大きなインパクトを与えた．したがって，この知見を検証・発展させる研究（前田 2004a, 2004b）も進められている．

本稿にとって松田（2001, 2008）は，上の疑念を計量的に裏づけるという意味で議論の出発点となる．だが松田（2001, 2008）は，一定の制約を受けていることも否定できない．これらの制約は，技術的な制約と意味的な制約に大別することができる．両者ともに計量的な手法を採用する場合に付随する問題といえる．

はじめに技術的な制約について．①ネットワークの規模が 0～2 名の場合は，検討の埒外に置かれている．ネットワークの密度は，次のような計算式で算出される（松田 2008: 30）．なお, D はネットワークの密度, A はネットワークのメンバーどうしが知己である数, N はネットワークの規模である．

$$D = A / (N \times (N-1) / 2)$$

したがって，ネットワークの規模が 0・1 名の場合は計算式が意味をなさないし，2 名の場合は密度が 0・0.5・1 となるから信頼できる変数とはいえない（松田 2008: 35）．もっと

も松田（2008: 35）によると，ネットワークの規模が 2 名の場合をふくめて分析しても，結果は 3 名以上の場合と大差がなかったという．だが，その場合でもネットワークの規模が 0・1 名の場合を分析に取り込めていないことは，若干の問題を孕んでいるように思う．なぜなら，ネットワークの規模が 0・1 名，つまり子育てを支えるメンバーがいないか極端に少ない場合，母親が育児不安に陥る危険は高いように思えるからだ[3)].

②逆に，ネットワークの規模が一定の人数以上の場合も，そのネットワーク全体の密度を測定することは技術上不可能である．松田（2008: 26）の場合，ネットワークの密度を測定するに当たって，ネットワークの規模は 4 名を上限としている．したがって，被調査者が 5 名以上のネットワークの規模をもっていたとしても，この点はネットワークの密度として浮かび上がってこない．

さらに，③ネットワークの密度がどんな中身をもっているかを，必ずしも十分に捉え切れていない．上の計算式で見たように，ネットワークの密度を測定するに当たって，ネットワークのメンバーどうしが知己かどうかは必要不可欠な要素となっている（変数 A）．だが，知己といっても色々なものがあって，たとえば仲良くしている場合と対立している場合は同じく知己ではあるが，中身がかなり異なるように思える．このネットワークの密度の中身の問題に対応すべく，松田（2008: 36）は「重みつき」の密度も測定している．この場合の重みつきとは，知己どうしの関係を親しい付き合いの有無で分けるというものである．計算式は次のようになる．なお，親しく交流している関係は S という変数で表現されている．

$$D=（S+A\times 0.5）／（N\times（N-1）／2）$$

確かにこの対処は，密度の中身を捉える上で一定程度，有益だといえる．じっさい，重みなしの場合と重みつきの場合で異なる結果が出たデータもある（松田 2008: 114）．だが，親しい付き合いがあるかないかという区別で，諸々の関係の全容を把握できるとは言い難い．上で挙げた例を再使用すると，喧嘩をしている関係が疎遠だという場合もあるだろうが，むしろ喧嘩をするくらいに関係が親密であったともいう場合もあるだろう．計量的な手法を用いる場合，たとえば上のような技術的な制約を指摘することができる．

上の③の問題は，母親たち自身がネットワークをどう捉えているかを解明できていないという問題と同根である．計量的な手法を用いることで，ネットワークの密度は数値的に測定可能なものとなって，たとえば疎・中庸・密とその差異を把握できる（し，重みをつけることで，もっと詳しく違いを捉えることもできる）．さらに，このネットワークの密度の違いと育児不安・育児満足との関係についても一定の知見を得ることができる．だがこの道筋で進んだ場合，たとえば次のような疑問に正面からの回答が得られることは期待しづらい．①母親たち自身は，自分たちのネットワークの密度（の違い）について，どう思っているのか．同様に②彼女たちは，何が現在のネットワークの密度を生み出したと思っ

ているのか．以上のような疑問である．つまり計量的な手法を用いた場合，育児ネットワークが母親たちに対してもつ意義の解明は周辺化されるように思えるのだ．じっさい，松田（2001, 2008）をはじめとするネットワークの密度に注目した研究（前田 2003, 2004a, 2004b）が，これらの問題を突っ込んで検討している様子は見受けられない．本稿は，場面を子育て支援サークルに限定しながらも，正にこの点にメスを入れる試みである．

また，この作業を進めるに当たって本稿では，対照的な付き合いかたをしている 2 タイプの母親たちを比較検討する．第 1 に，子育て支援サークルで出会って，グループといえるまでに緊密な付き合いをしている母親たち．第 2 に，同じく子育て支援サークルの常連であるが，特定の母親と親しい付き合いはしていない母親たち．この 2 タイプの付き合いかたは，上の計量的なネットワークの密度の議論に照らし合わせることが可能である．つまり，前者が密度の大きい稠密なネットワーク，後者が密度の小さい疎なネットワークに准じる付き合いかただといえる．したがって本稿は，計量的に把握された育児ネットワークの密度を具体的な様相で捉え直すという点でも一定の意義をもっている．またこの作業を通じて，間接的ながらも中庸なネットワークと名づけられた付き合いの実像の一端にも迫ることができたらと思う．

3　先行研究の検討

3.1　母親どうしのつながりのネガティブな効果

落合（2004: xi-xii）は，母親どうしの葛藤から生じたとされる子どもの殺害に言及しながら，母親どうしのつながりが時として深刻なトラブルを生じさせることに懸念を表明した．こういった懸念は，推測するに少なからぬ研究者・多くの母親たち自身が認識するところではあっただろう．だが松田（2001）以前の研究で，この点に注目した研究は必ずしも多くなかった．少ない例外のひとつとして住田・溝田（2000）がある．住田・溝田（2000）は，子育てサークルへの活動参加と育児不安の関係を調べた質問紙調査である．

この調査において住田・溝田（2000）は，従来注目されることが多かった子育てサークルのプラスの効果だけでなく，マイナスの効果にも注目している．プラスの効果は，子どもの遊び相手ができたとか母親の話し相手ができたといった，母親どうしのつながりから生じた効果をふくんでいる．これに対してマイナスの効果は，「他の母親の話を聞いて焦ったり不安になった」，「他の子どもの様子をみて焦ったり不安になった」という 2 項目を盛り込んでいる．つまり，母親どうしの付き合いから生じる問題である．住田・溝田（2000）は分析の結果，たとえば次のような知見を報告している．すなわち，マイナスの効果を感じているかどうかと，子育てにかんする一般的な不安感情の高低・子どもの成長・発達にかんする不安の高低・育児能力との不安の高低とで有意な相関が見られる場合がある（住田・溝田 2000: 35-9）．もちろん因果関係が逆の場合も十分想定されるが，この結果から子育てサークルへの参加がこれらの不安を高めている可能性を推測することはできる．

既に 2 節で，松田（2001, 2008）の中庸なネットワークの議論が，母親どうしのしがらみについて考える上で有益な示唆となることは述べた．この松田（2001）の議論を参照しながら前田（2004a）は，母親どうしの付き合いとストレス（ストレーン）の関連について，岐阜県で 2 歳から 3 歳の子どもをもつ母親を対象として質問紙調査を実施している．このなかで前田（2004a）は，母親の付き合いのタイプ別にサポート（育児にかんするものと，将来への展望など育児と直接関係ないものを区別）・ストレスとの関連を見ている．母親の付き合いのタイプとは，子どもを媒介とした付き合いが多いネットワーク，母親の出身学校の付き合いを中心としたネットワーク，職場関係の付き合いを中心としたネットワークなどである．

結果，前田（2004a: 26-7）は次のような知見を得ている．①育児サポートについては，子ども中心型ネットワークの母親が出身学校中心型ネットワークの母親・職場中心型ネットワークの母親に比べて多く獲得している．しかし逆に，②育児以外のサポートについては，出身学校中心型ネットワークの母親や職場中心型ネットワークの母親が子ども中心型ネットワークの母親に比べて多く獲得している．さらに，③ストレスについては，子ども中心型ネットワークの母親がもっとも大きい．とくに③の結果が，本稿にとって重要である．この結果について前田（2004a: 28）は，子ども中心型ネットワークをもつ母親が代替的な交友を築くチャンスが制約されているがゆえに，ストレスフルなネットワークであっても維持せざるを得ないのではないか，と分析している．さらにここから，「親同士の連帯的なネットワークづくりの支援とともに，親以外の役割を持つ機会を提供し，ネットワークの選択性を高めるような支援策」が必要であるとし，一時保育などの積極的な推進を提唱している（前田 2004a: 29）．つまり，子どもを介した付き合いの場合，母親役割から離れることが難しいから，息苦しくなってしまい，自分の将来への展望も描きにくいということである．この主張は，母親アイデンティティが母親たちの大きな負担となっているという知見（矢澤・国広・天童 2003; 柏木 2008）とも呼応するものといえる．

確かに，子どもを媒介とした付き合いである以上，母親役割から離れにくいという主張は容易に首肯できるものである．しかし，それが具体的にどんなことを指示しているかは，必ずしも明確ではない．また，多くの母親たちが現に子ども中心型ネットワークを形成しているのだから，どうしたらお互いの付き合いが桎梏へと転化しないで済むのかを明らかにすることも，現実問題へのひとつの対処策として一定の意義がある．本稿は，子育て支援サークルにおける母親どうしの付き合いを詳しく検討することで，この点について何らかの示唆となることが予想できる．

3.2　母親どうしのつながりと子育てサークル・子育て支援サークル

以上で確認した育児ネットワークの議論に対して，子育て支援の現場に近い研究では母親どうしのつながりについて，何が語られてきたのだろうか．次にこの点を確認する．原田（2002, 2006）は，子育て支援研究の第一人者のひとりである．原田（2002）は青少年

期までの成長を見据えた独自の子育て支援を提唱し，公的な子育て支援ではなく市民活動としての子育てサークルのネットワーキングに期待を寄せる．原田（2002: 156-9）は，子育てサークルが母親・子ども両者にとって有意義だとする．すなわち，母親については子育て仲間を得ることで育児不安が和らぐことを期待でき，子どもについては遊び仲間を得ることが発達上望ましいとしている．

さらに，特定の「つどいの広場」の活動を紹介した清水（2008: 123），特定の地域の子育て支援サークル・子育てサークルのネットワークを紹介した寺田（2005: 68-9），70 ヶ所近い「つどいの広場」の利用者を対象とした質問紙調査を実施した渡辺（2006b: 95）と，様々なレベルの研究が，子育て支援サークルにおける母親どうしのつながりに肯定的な意義を認めている．だが管見の限りでは，母親どうしのつながりの消極的な側面は，必ずしも研究が進んでいるように見えない．

この空白を埋めるものとして，品川（2004, 2005）の子育てサークルのインタビュー調査は示唆に富む．品川（2004, 2005）は，札幌市で活動していた同じ子育てサークルのメンバー10 名以上に対して，活動期間と解散後に 1 回ずつインタビューを実施した労作である．このなかで品川（2004: 211-5, 2005: 53-5）は，サークルの活動が解散へと至った理由として，①活動の運営にかんする負担の特定のメンバーへの偏重・運営をめぐるメンバーどうしのトラブル，②サークル内部で小グループができ，サークル全体としての求心力が低下したことなどを挙げている．つまり品川（2004, 2005）は，正に母親どうしのつながりを求めて開始した活動が，しがらみへと転化して解消へと至る場合があることを例証している[4)]. この意味で品川（2004, 2005）の知見は本稿にとって重要である. だが, 品川（2004, 2005）が調査した子育てサークルと本稿が取り上げる子育てサークルは，いくつかの点で重要な違いがあることにも留意せねばなるまい．第 1 に，活動の運営に対する負担・コミットメントが違う．子育てサークルの場合，母親たちが活動の運営に当たっている．これに対して子育て支援サークルの場合，母親たちは基本的に利用者として子育て支援サークルを訪れるだけである．したがって子育て支援サークルの場合，活動を運営する負担が重くて活動が解消へと至るということは少々考えにくい．第 2 に，付き合う相手の選択性が大きく異なる．品川（2004, 2005）が取り上げた子育てサークルは，結成当時 23 名と大所帯だったとはいえ，母親たちは同じサークルのメンバーとして共同的な活動をしていた．これに対して子育て支援サークルでは，入れ代わり立ち代わり別の母親がやってくる．したがって，母親たちが同じ子育て支援サークルを利用しているということだけで，お互いを同じグループのメンバーだと捉えていると想定することは到底できない．同時にこのことは，子育て支援サークルを利用する母親たちはお互いの距離の取りかたを自由に決める余地が大きいことを意味する．では，母親たちはどうやってお互いの距離を測りながら，付き合っているのか．この問題を解明することは，育児ネットワークの密度を具体的な様相において把握する上で，重要なポイントのひとつであるに違いない．

4　調査

4.1　子育て支援サークルと子育てサークル

本稿は主として，大阪府南部の同じ子育て支援サークルの常連利用者 9 名へのインタビュー調査にもとづいている．インタビュー調査は，2008 年 7 月から 12 月にかけて 7 回実施した．インタビューは 1 回につき 1 時間から 2 時間程度行った．インタビュイーにかんする基本的な情報は，以下の表 1 に整理している．また私は，この子育て支援サークルで，2006 年 5 月から 2010 年 3 月まで参与観察・ビデオカメラを用いた調査を行った．本稿では，これらの調査で得た情報も適宜参照する．

表 1　インタビュイーの基本的な情報

名前	年齢 1)	子どもの性別と年齢 1)	職業	幼保利用	実家	夫の職業
A	30 歳代前半	息子（3 歳 8 か月）	専業主婦	なし	市内	会社員
B	30 歳代前半	息子（3 歳 3 か月）	専業主婦	なし	隣市	会社員
C	28 歳	息子（3 歳 2 か月）	パート	保育所	隣市	会社員
D	27 歳	息子（3 歳 1 か月）・娘（7 か月）	専業主婦	なし	他県	会社員
E	28 歳	息子（2 歳 6 か月）	専業主婦 2)	なし	隣市	会社員
F 3)	27 歳 4)	息子（4 歳）4)	パート	幼稚園	隣市	会社員
G 3)	28 歳 4)	娘（4 歳）4)・娘（1 歳）4)	パート	保育所	隣市	会社員
H	33 歳	娘（3 歳）	パート	なし	市内	会社員
I 3)	38 歳	息子（7 歳）・息子（5 歳）	パート	保育所	市内	会社員

1)　母親・子どもの年齢はインタビュー当時の年齢

2)　月数回不定期に短時間，書店でパート

3)　当時，利用者からスタッフになって活動していた

4)　数ヶ月単位で不正確な可能性がある

次の 4.2 節でこの子育て支援サークルについて紹介するが，それに先立って子育て支援サークルと子育てサークルの活動の異同について，改めて詳しく説明しておく．第 1 に指摘できることは，物理的な環境である．子育て支援サークルは公園と同じように母親たちがあつまる場所であるが，同時に公園と違って天候に左右されないで利用できる場所である．ここで言う天候には，雨だけではなく，夏の暑い時期・冬の寒い時期など屋外で長時間過ごすことが難しい場合もふくんでいる．これに関連して，たとえば I は「公園だって，クソ暑いとき，クソ寒いとき，どうすると思う？　なあ？　子どもだってしんどいし」と語った．もちろん，子育てサークルも公民館に部屋を借りるなどして，屋内で活動するこ

とが多い．しかし恒常的な場所が確保されているかどうかという点で，両者に大きな違いがある．

第 2 に指摘できることは，3.2 節でも述べたように利用者（母親）とスタッフが分離している点である．ある子育て支援サークルの元スタッフは，子育て支援サークルを評して「スタッフのいる公園」と呼んだ．この表現は，子育て支援サークルが公園と同じく子どもを遊ばせる場所だが，同時に公園と違って子どもをスタッフに任せられるという安心感を上手く言い表している．たとえば，この子育て支援サークルの建物には庭があるが，子どもが庭で遊ぶ場合はスタッフがついていく．これに関連して H は，自分の子どもが「永遠に走り回るしかない子」だから公園だと危険もあるが，子育て支援サークルはスタッフがいるから安心だと語った．

スタッフがいるメリットは，子どもを安心して遊ばせられる点に留まらない．つまり，スタッフが子どもの相手をしている間，母親たちは一時的に子どもから離れることができる．むしろこの効果を狙って，スタッフが子どもの相手を引き受けることも少なくない．こうすることによって，母親たちだけで話をする環境を整えようとするのである．本稿で取り上げる子育て支援サークルでは，スタッフが頃合いを見計らって飲み物・お菓子の注文を取る.そして母親たちがお茶をしている間,スタッフが子どもの面倒を見るのである．子育てサークルの活動タイプにも左右されるだろうが，このように比較的長時間，母親が子どもから離れるチャンスを得るという点も，子育て支援サークルと子育てサークルの違いだといえる．

以上，子育て支援サークルと子育てサークルの差異について述べた．ここで 1 点，予想される誤解とこれへの抗弁を述べたい．上で見た 2 つの差異と，子育て支援サークルが「つどいの広場」という政府事業を受託していることも相俟って，両者が全く別種なものという印象を受ける読者がいるかもしれない．だが，この理解は子育て支援サークルと子育てサークルの活動を総合的に見た場合，正鵠を射たものとは言えない．理由を 2 つ挙げる．1 つ目は，公的援助の有無という観点から見た場合に，両者の違いが程度問題だということである．現下では子育てサークルも子育て支援サークルと同じように，何らかの形で公的な援助を受けている場合が少なくないからである．たとえば，活動に当たって金銭的な援助を受けている場合もあろうし，公的な施設の借用に当たって優先的な割当を得ている場合もあろう．

これに関連して 2 つ目として，子育てサークルをボトムアップな自主的な活動，子育て支援サークルをトップダウンな活動と二項図式で捉えることはできない．じっさい NPO が運営している「つどいの広場」（2010 年時点で全体の 16%を占める）は，子育て支援サークル・子育てサークルとして出発したものが少なくない．牧野（2009: 14-5）が，これらの活動を市民的な活動として位置づけているゆえんである．つまり「つどいの広場」が創設された後で，市町村などが音頭を取る形で準備・設立されたのではない子育て支援サークルが少なからずある．少なくとも本稿が対象としている子育て支援サークルは，子育て

サークルから出発し，2005 年 8 月から「つどいの広場」を受託している．2004 年 8 月に NPO としての法人格を取得しているから，少なくとも 1 年間は「つどいの広場」を受託せずに子育て支援サークルとして活動していた．以上から，子育て支援サークルと子育てサークルを完全に別のものと捉えることは不適切であることが理解できる．

4.2　調査対象の子育て支援サークル

寄り道が少し長くなったが，次にインタビューした母親たちが利用する子育て支援サークルについて少し詳しく説明する（なお，沿革については既に 4.1 節で少し述べたから，ここでは立ち入らない）．この子育て支援サークルは，大阪府南部の X 市で活動している NPO である．この NPO は，同市に 4 ヶ所の「つどいの広場」を運営している．4 ヶ所合計の利用者数は，2010 年度で延べ 8,618 組・18,981 名（大人 8,618 名，子ども 10,363 名）に上る．本稿がインタビューを取り上げる母親たちは，このうちの 1 ヶ所で知り合い，主として利用していた（この場所を Y としておく）．Y は X 市が誇る大阪府南部屈指のベッドタウンに位置している．大阪市中心部から電車で 1 時間程度という距離で，近隣住民はサラリーマン世帯が多く，とくに Y 近くの団地は若い夫婦世帯が目立つ．このことは，Y の利用者に専業主婦が多い理由のひとつだと見て間違いない．なお Y 個別の 2010 年度の利用者数は，延べ 3,723 組・8,073 名（大人 3,723 名，子ども 4,350 名）であった．なお利用料は，飲み物・お菓子・イベント参加費用などを除いて無料である．

Y は，平日・土曜日の昼間（10 時～16 時）に開設している．土曜日も開設しているが，男性つまり父親の利用者は極めて稀である．なお開設時間内であれば，出入場は基本的に自由である．但し，午前・午後の 2 部制を取っている．スタッフは基本的に 2 名がついて，母親の話を聞き，子どもの相手をし，4.1 節で述べたが母親たちにティータイムの時間を提供する．ティータイムで母親は，他の初対面の母親とテーブルを囲む場合もある．そしてこれは，スタッフがティータイムを提案する狙いのひとつでもある．写真 1 は，このティータイムで母親たちが利用するテーブルである．

最後に，少々重複する部分もあるが，Y の利用者の全般的な傾向について 3 点付言する．既に述べたように，①Y の利用者の多くは，近くの団地・マンションに住む，比較的若い専業主婦の母親たちである．とはいえスタッフたちも，子どもの年齢は把握しても利用者の年齢については把握していない場合が多いので，正確な年齢層は分からない．私が調査を続けてきた感覚から言えば，利用者の大多数は 20 歳代後半から 30 歳代前半に集中していると思う [5]．利用者の年齢層が比較的若いことに関連すると思うが，②利用者は子どもを 1 人しかもたない母親である場合が多い．言い換えると，第 1 子を産んで，はじめての子育てに取り組んでいる母親の利用者が多いという傾向が見られる．さらに，③比較的短い期間で転居する夫婦も少なくない．Y 周辺の住宅地域のなかでも上で述べた団地は，新婚の夫婦が最初の住まいとして選ぶのに手頃な家賃である．このことは，この団地暮らしで資金を貯め，他の住宅地に移り住むプランをもつ夫婦が多いことを意味している．した

がって，Y の利用者でも（一定期間の利用回数は多くても）長期間定着するのではなく，比較的短期間で来なくなることが見受けられる．

写真 1　ティータイムで使用するダイニングテーブル

4.3　インタビュー・データと分析の手法

インタビューは 4.1 節冒頭で述べた要領で実施したが，ここで若干補足する．①インタビュー実施のセッティングについて．インタビュイーのうち，A・B・C・D・E の 5 名はグループ化しているので，グループの話を聞き出す上で有益と考え，2 名ずつでインタビューを実施した（A・C，B・E，C・D の 3 ペア）．また F・G の 2 名も同時にインタビューを行った．理由は，彼女たちの付き合いが比較的長く，インタビュー当時は同僚スタッフとしてこの子育て支援サークルに勤務していたからである（このインタビュー調査では，スタッフから見た子育て支援サークルについても調べていた）．②これらのインタビュイーを選んだ理由について．理由は大きく次の 3 点である．第 1 に，インタビュイー9 名が全て，この子育て支援サークルの常連利用者であったこと．本稿の目的に照らして，インタビュイーは一定以上の頻度で当該子育て支援サークルを利用している必要がある．第 2 に，既に 2 節の最後で述べたように，これらの利用者の付き合いが対照的なものであること．以下で詳しく検討するが，A・B・C・D・E の 5 名はこのメンバーと会うためにこの子育て支援サークルを利用し，残りの 4 名は特定の母親に会うために利用しているのではなかった．つまり，利用様態が大きく異なるのである．したがって両者を比較することで，子育て支援サークルの利用のバリエーションを捉えられると同時に，育児ネットワークの密

度の議論と比べる上でも便利である．これに関連して第 3 に，A・B・C・D・E の 5 名については，この 5 名がこの子育て支援サークルで目立って仲の良いグループだったからである．これは私の観察からもいえるし，スタッフの発言からも裏づけられる．この点については，5.3 節で詳しく説明する．

③インタビュー・データの記録・分析の手法について．インタビューは全てビデオカメラで録画し，録画データは全て 20 秒から 60 秒単位で発言内容を整理・コーディングする作業を行った．データ全体を詳しくコーディングした理由は，コーディング自体が分析であるという立場（Lofland and Lofland 1995）からである．具体的にコーディング作業を進めるに当たっては，Lofland and Lofland（1995）の他に，Emerson, Fretz and Shaw（1995）から多くの示唆を得た．

Emerson, Fretz and Shaw（1995: 46）は，フィールドワークを進めるに当たって，フィールドにいる人々自身の意味づけを重視するように推奨する．この立場に則るなら，データのコーディング作業は，データの外側から持ち込んだ概念・カテゴリーを用いることを可能な限り避けることが望ましい．なぜなら，その作業によって人々自身が捉えている意味づけを把握し損ない，外部的な別様の物差しでデータを読み込む危険があるからである（Emerson, Fretz and Shaw 1995: 243）．

本稿の目的は，母親どうしの付き合いを特定の外部的な基準から測定・数量化して捉えることではない．むしろ，母親たち自身がお互いの関係をどのように捉えているかを解明することにある．この意味で Emerson, Fretz and Shaw（1995）は，本稿にとって有益な指針を提供するものといえる．Emerson, Fretz and Shaw（1995: 235-99）は，当該内部的な観点からデータを記述・分析するポイントとして，フィールドの人々が用いている人物指示表現・挨拶・固有の比較表現，フィールドの人々自身による説明・物語・類型学などを挙げている．以下のデータを検討する部分では，母親たち自身がお互いの付き合いについて語ったことを多く引用している．引用に当たって「母親たちにとって…」とか「…と，母親たちは考えていた」といった表現をよく用いているが，その理由は上のフィールドの人々自身の説明・物語といった側面を意識していることを強調したいからである．

最後に以下の行論を簡単に述べておく．5 節・6 節で A・B・C・D・E の 5 名について検討し，続く 7 節で F・G・H・I の 4 名について若干の検討を行う．最後に 8 節で，これらの検討と先行研究から導かれた課題を突き合わせていくつかの議論を行い，本稿を閉じる．

5　グループ化した母親たち

本節・6 節では，A・B・C・D・E の 5 名について検討する．4.3 節で少し述べたように，この 5 名の母親たちは，他の母親たちに比べるとグループと言えるくらいつながりが稠密である．はじめに，このグループのメンバーの基本的な情報について若干の指摘をし（5.1 節），次に彼女たちがどのように出会い，親しくなったかの沿革を述べる（5.2 節）．さら

に，彼女たちがどれくらい親しい関係かを本人たちとスタッフの言葉から確認する（5.3 節）．最後に若干の考察を行う（5.4 節）．

5.1　メンバーの基本的な情報

既に表 1 でインタビュイー9 名の基本的な情報を提示したが，改めて A・B・C・D・E の 5 名だけの基本的な情報を次の表 2 として掲げる．他の母親たちとの付き合い，メンバーどうしの付き合いを考える上で, 次の点は重要である. すなわち 5 名全員が専業主婦で, 基本的に保育所・幼稚園を利用していない．唯一 C がパート（平日週 5 日）に出て保育所を利用しているが, C も他のメンバーと出会った時点では専業主婦だった. また配偶者は, 全員が会社員で自宅と職場が離れているため，彼女たちが普段から子どもの面倒を見ている．このことから，このグループのメンバーはパートに出ている母親・フルタイムで働いている母親たちに比べて，この子育て支援サークルを利用するチャンスが多いといえる．したがって，他の母親たちとのつながりを得るチャンスも多くなる [6]．この意味で，子育て支援サークル・「つどいの広場」が想定している支援対象のコア部分に位置しているといえる．

表 2　グループ化した母親たちの基本的な情報

名前	年齢 [1]	子どもの性別と年齢 [1]	職業	幼保利用	実家	夫の職業
A	30 歳代前半	息子（3 歳 8 か月）	専業主婦	なし	市内	会社員
B	30 歳代前半	息子（3 歳 3 か月）	専業主婦	なし	隣市	会社員
C	28 歳	息子（3 歳 2 か月）	パート	保育所	隣市	会社員
D	27 歳	息子（3 歳 1 か月）・娘（7 か月）	専業主婦	なし	他県	会社員
E	28 歳	息子（2 歳 6 か月）	専業主婦 [2]	なし	隣市	会社員

1)　母親・子どもの年齢はインタビュー当時の年齢

2)　月数回不定期に短時間，書店でパート

また出身地に目を移すと，D が他県出身である以外は近くに実家があり，父母からのサポートを得やすい環境である．インタビューによると，C は実家との行き来があまりないが，A・B・E は実家からのサポート，とくに親子連れで実家に夕食を食べに行くとか，夫の出張時に実家に泊まるといった実質的なサポートを得ている．これに対して D は結婚にともなって来阪し，出産時や年に数回の帰省を除くと実家からのサポートはあまり得ていない．D は積極的に子育て支援などの情報をあつめたと語ったが，実家からのサポートが少ないことも理由のひとつだろう．

5.2　メンバーの出会いと付き合いの進展

メンバー自身の発言を盛り込みながら，グループの沿革について簡単に確認する．グループのメンバーたちの付き合いは，2006 年の 3 月～4 月頃に B・C・J（後に，他県へ転居）の 3 名が Y で出会ったところから始まる．3 名はすぐに意気投合し，連絡先を交換，以後お互いの家を訪問し合う関係になる．少なくともこの子育て支援サークルでは，母親たちがこれほど早くお互いの連絡先を交換することは珍しい．B・C・J の 3 名が出会った数ヶ月後の 7 月に D が B と知り合い，C・J とも交流を深めていった．さらに数ヶ月後の 11 月に A が D・J と知り合った．この付き合いのはじめの頃は，Y 以外の場所であつまることが多かった．その理由は，子どもの月齢が小さかったからである．当時，C の子どもと B の子どもが 7・8 か月，J の子どもに至っては 3 か月で「首グラグラやった」（C）．そのため，子どもが小さすぎて動き回らないから，Y に連れてくる必要がなかったという．

表 3　グループ化した母親たちの付き合いの年表

時期	出来事（備考）
2006 年 3 月・4 月	B・C・J が，Y で出会う（その場で連絡先を交換）
2006 年 4 月・5 月	B・C・J などで，定期的にお互いの家にあつまりはじめる
2006 年 7 月	B と D が，Y で出会う
2006 年 11 月	A が C・J と，Y で出会う
2006 年～2007 年の冬	A・B・C・D・J でよく Y の 1 歳タイムにあつまるようになる
2007 年 1 月～3 月	土曜日にあつまりはじめる
2007 年 2 月	C と E が近所のスーパーマーケットで再会する
2007 年 4 月	E が Y に来はじめる
2007 年 4 月／5 月	A・B・C・D・J で，子どもを連れて隣市のレジャー施設を訪れる（夫は抜きで）
2007 年 8 月	B・C・E・J で，吉本新喜劇を見に行く（子どもは夫に預け，母親だけで）
2007 年 9 月	J が夫の仕事の都合により，他県へ転居
2007 年 11 月	C がパートに出る

グループのメンバーたちは, 子どもが 1 歳を過ぎた頃から足繁く Y に通うようになった．子どもが動き回るようになったため，4.1 節で述べた理由から Y をあつまる場所として選んだと推測できる. 以降, グループのメンバーたちは, 定期的に Y を利用するようになる．ピーク時は週 3 回以上利用するメンバーもいた．グループの中心であった C が，2007 年 11 月に子どもを保育所に預けてパートに出，この時期を境に利用と付き合いは一時停滞した．しかし数ヶ月後に，週 1 回土曜日午前という曜日・時間帯を決めてあつまることが復活し，毎週メンバーが顔を揃えるとは限らないが 2009 年 9 月時点でも，このあつまりは続

いていた．以上のメンバーたちの関係の時系列的な進展については，表 3 として掲げた．

5.3　付き合いの様態と意義

メンバーの基本的な情報とグループの沿革を押えたところで，メンバーどうしの付き合いの様態と意義について述べる．端的に言って，このグループのメンバーが Y を利用する主たる理由は，他のメンバーと会うことである．お互いと会うことがどんな意義をもっているのかという質問に対して，C・D は「友達おらへんかったら，楽しくないなあ」（C），「ぜったい，嫌」（D）と，お互いの関係が友達であることを暗に認めながら，グループ・メンバーどうしの付き合いの意義を強調した [7]．さらに A たち 5 名は一部の例外（これについては 6.5 節で説明する）を除き，お互いを「名前＋ちゃん」で呼び合っている．このような呼称は Y を利用する他の母親たちに見られない珍しいことで，A たち 5 名の親しさをうかがわせるものである．

また子育て支援サークルのスタッフも，A たち 5 名の仲が良く，グループ化していると捉えている．複数のスタッフが，A たちくらい仲が良い母親はこの子育て支援サークルで見たことがないと語った．メンバーのなかでも D は，D 親子だけで Y を利用することがある．だが D 親子だけで Y にやって来た日，その場にいたスタッフたちは D に，今日は D 親子だけで来たのかと質問していた（07.07.19 のフィールドノーツ）．このエピソードは，スタッフが D たちをグループとして捉えていることを物語っている．

A たちのグループ化は，子育て支援サークルの利用様態の違いとしても表れている．いくつかの例を挙げる．①利用の曜日・時間帯．常連利用者は A たち以外にもたくさんいるが，A たちのように特定の曜日・時間帯を決めてあつまる利用者は珍しい．インタビューした他の常連利用者のなかでは，F が一時期 G と会うために特定の曜日に利用していたというが，G はインタビュー時までこの事実を知らなかった．その上，F はこの曜日以外も Y を利用していた．特定のメンバーと会うことをお互いに期待して，特定の曜日・時間帯に待ち合わせるという点で，A たちのグループ化は顕著だといえる．但し，A たちが必ず来るという約束を交わしているのではない．むしろこの曜日・時間帯に来たら，「連絡取らなくても（メンバーが）誰かいる」（C）という期待をお互いが抱いているに過ぎない．じっさい他のメンバーが誰も来ていなくて，メンバー以外の利用者と話をしていることもある．②他の利用者との関係．グループ化した結果，A たちはメンバー以外の母親たちと話したり，メンバーの子ども以外と子どもを遊ばせたりすることが極端に少ない．ティータイム・昼食などでも，グループでかたまっている場合が多い [8]．つまり，付き合うメンバーが固定している．但し①でも述べたように，他のメンバーが誰もいない場合はこの例ではない．Y の常連利用者にはグループ化した母親たちが他にもいるが，上で述べた点から見て，A たち 5 名くらい仲が良く，稠密で閉じた関係を築いている母親たちは見当たらない．

A たち 5 名が子育て支援サークルだけでなく，子育て支援サークル以外の場所でも積極

的に付き合いをしていることも，彼女たちの関係の親しさを示すものである．後で見るように，同じ常連利用者であっても，F・G・H・I の誰も，Y で出会った他の母親たちと外部で親しく付き合ってはいなかった．前掲表 3 の年表を見ると，2007 年の春・夏に 2 回，母親たちで行楽施設に出かけていることが分かる．とくに，2 回目の吉本新喜劇は，子どもを預けて母親たちで出かけている．このことから，A たちの付き合いが単に子どもを媒介としたものではなく，純粋にお互いの交友を楽しむものへと進展していることがうかがえる．この 2 回以外でも，連れ立って Y 以外の子育て支援へ出かけることは頻繁にしている．また，このメンバーで自主的な親子体操のグループも運営している．この体操のグループについては，H も利用したことがあるという．さらに，元メンバーだった J の転居時は，引っ越し作業の間，メンバーたちが J の子どもを預かったりもしていたという．

5.4　若干の考察

以上から分かるように，A たち 5 名は Y を利用する母親たちのなかで，例外的といえるほど深い関係を発展させている．これを裏づけるものとして，①定期的にグループであつまる日を設けていること，②メンバー以外の母親とは積極的に付き合わないこと，③子育て支援サークル以外でも頻繁で踏み込んだ付き合いがあること等を挙げた．

とくに③は興味深い．第 1 に，7 節でも検討するように常連利用者であっても，子育て支援サークル外部で他の母親と親しく付き合うことは珍しい．第 2 に，A たちの付き合いが子どもを預かるという実質的な育児サポートへも達していることも珍しい．子育て支援サークルを利用することで他の母親から，地域の子育て情報（たとえば，地域の保育所・幼稚園・子育て支援の評判）とか子育ての苦労を話し合って気持ちを楽にするといった，情報的・情緒的サポートを得ることは比較的容易である（後者の情緒的サポートについては，1 節で引用したように「つどいの広場」の設立主旨でもある）．このことは，いくつかの子育て支援サークルを対象とした質問紙調査（大豆生田 2006; 渡辺編 2006b）からも裏づけられる．

だが子育てを代替する実質的サポートについては，情報的サポート・情緒的サポートと様相が大きく異なる．ある子育て支援サークルの利用者を対象とした質問紙調査（大豆生田 2006: 154-5）では，子どもの一時的な預け先として子育て仲間を選ぶ母親は，複数回答が可能なのに 10%に満たないという結果が出ている．この割合は，夫を選ぶ割合（90%），自分の親を選ぶ割合（50%）と比べて目立って低い．この結果について大豆生田（2006: 154）は，母親たちがお互いへの気遣いから子どもを預けることを遠慮している可能性を示唆している．この示唆は，私が Y における調査から得た感覚とも合致している．

実質的な育児サポートという比較的高いハードルをクリアしていることから，A たち 5 名が比較的踏み込んだ関係を築いていることが分かる．この意味で A たち 5 名のグループは正に例外的である．ここで次のような疑問を抱くことは自然だろう．つまり，なぜ他の母親たちではなく，この 5 名の母親たちが親しくなったのか．次に，彼女たちへのインタ

ビューにもとづいてこの課題を検討する．

6　グループ化した理由

インタビュー・データを検討した結果，A たち 5 名が親しくなった理由として語ったことを次の 5 点に整理することができた．①子どもたちの年齢・月齢が近いこと．②子どもの性別が同じであること．③社交的なメンバーがいること．④メンバーどうしの性格的な相性．⑤メンバーどうしの住まいが多少離れていること．以上の 5 点である．以下でも述べるように，これらの理由は相互に関連しているが，同時に彼女たちはこれらを独立した別個のものとして語った．なお，これら 5 点の理由を抽出するに当たっては，あくまでも A たち 5 名自身の理解にもとづくことを重視した. つまり, 彼女たち自身の理解を離れて，外部者（私・スタッフ・他の母親たち）の立場から理由を構成することを避けた．なぜなら本稿の主眼は，付き合いをしている母親たち自身がお互いの付き合いをどんなものと捉えているか，を解明する点にあるからである．

6.1　子どもの齢

メンバーの数名（A・C・D）は，メンバーが親しくなった理由として，子どもたちの齢が近いことを挙げた．たとえば C は，子どもの齢が近いと，することや興味をもつことが同じだから，子どもたちも一緒に遊んでいて楽しいと思うと言った．子どもたちにとって齢の近い子どもと遊ぶことは特別に楽しいことだ，と母親たちは考えていた．

じっさい，A たちのグループの子どもたちの齢の差は最大でも 12 ヶ月である（B の子どもと E の子どもの差）．B・C・D の子どもたちについては，誕生日の差は 2 ヶ月しかない．さらに，彼女たちが親しくなったのも，「1 歳タイム」という Y の 1 歳児の母親限定の時間帯を利用することを通じてだった（表 3 を参照）[9]．

このグループのメンバーは，子どもの齢の異同を年齢のレベルではなく月齢のレベルで捉えていた．なぜなら小さな子どもの場合，少しの月齢差でも成長・発達が大きく違うからだという．これによって，子育て支援サークルを利用する多くの母親たちがメンバー候補から除外されることになる．

たとえば，E を除くグループのメンバーが Y を利用しはじめた頃，1 歳タイムでよく居合わせていた利用者に J という母親がいた．当然ながら J の子どもも 1 歳児で，B・C・D の子どもたちと J の子どもの月齢の差は 5 ヶ月から 7 ヶ月である．だが C と D は，J の子どもを自分たちの子どもと同じとは捉えていなかった．むしろ C・D は「(J の子どもの誕生日が）2 月やから，発達がちょっと違う」と口を揃えた [10]．

子どもの齢が近いことは，子どもどうしが楽しめるという面だけでなく，母親自身にとっても一定のメリットがある．なぜなら一般的に言って母親たちは，自分の子どもと近い齢の子どもの発達・成長に大きな関心をもっているからである [11]．また子どもどうしの齢

が近いと，子育ての愚痴を理解してもらいやすく，言いやすいということもある．つまり，子どもの齢が近い母親どうしは，子どもについて情報交換し，愚痴を言い合う上で貴重な相手となりうるのである．たとえば，C は「似た月齢のほうが話しやすくて，気が合うのかなあ」と言った．子どもの齢が近いことは，子ども・母親の両側面からメンバーの付き合いを促進したといえる[12)]．

6.2　子どもの性別

A･C･D は，グループのメンバーが親しくなった理由として子どもの齢の近さを挙げた．彼女たちは同時に，子どもたちが全て男子だったことも指摘した．彼女たちが子どもの性別を重要だと考えた理由は，子どもの遊びは男女で大きく違うと考えているからである．たとえば C・D は，男の子と女の子の遊びかたを次のように比較して語った．女の子は折り紙を折ったり，お絵描きをしたりしてテーブルに腰を落ち着けて遊ぶことができる．男の子はこのような遊びかたができない．「すぐ飽きて，もう違うとこウワーッて行って，またこうやってウワーッて行って，それを追っかけ回すみたいな」(C) 状態になってしまい，落ち着いて遊ぶということができない．「それやったら，男の子どうしで遊んだほうが（良い)」（D）というのである．つまり男女の遊びかたが大きく違うから，同性どうしで遊んだほうが子どもたちも楽しいだろう，と彼女たちは考えていた．

しかし子どもの齢の近さ同様，男の子どうしで遊ぶことは母親たちにとってもメリットがある．端的に言って，男の子どうしで遊んでいるほうが母親たちは気楽だというのである．たとえば，子どもどうしで何かトラブルが生じた場合に，子どもの性別の違いが顕在化する．男の子どうしの場合，「何かあっても，（親どうしが）『まあ，いいよ，いいよ』っていうので」（D)，「『お互いさまやから』っていう」（C）形で済ませることができる．つまり，子どもがお互いに迷惑を掛ける可能性があるから，他の子どもが自分の子どもに何かされても寛容になることができる．また逆に，自分の子どもが他の子どもに何かをした場合も相手の親に同じことを期待できる．したがって親としても男の子の親とは気楽に付き合うことができる．

これに対して，自分の子どもが女の子とトラブルになった場合は厄介である．たとえば，自分の子どもが女の子を叩いてしまったら，「もう，『女の子なんやし叩いたら，あかんやんか』って」（C)，自分の子どもを叱らなければならない．また，相手の女の子とその親に対しても「『ごめんな』,『ごめんな』って」（C）謝らなければならない．女の子とのトラブルは「親にも気ィ遣う」（C・D）ものになってしまうのである．つまり，女の子とのトラブルは親として対応が面倒なものとなる．

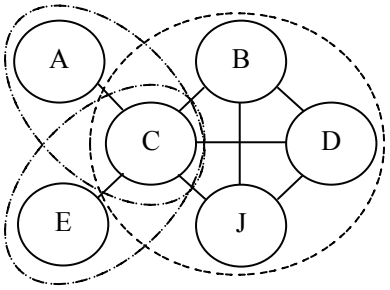
以上で述べたように，子どもどうしの遊び，とくにトラブル時の対応という面から，母親たちは男の子の母親のほうが付き合いやすいと考えていた．この考えかたの背景として，母親たちが子どもどうしのトラブルを子どもたちで完結するものと捉えていないことや，子どもの性別によってトラブル時の対応が異なる（べき）と思っていることがある．母親

たちは，わずか 3 歳に満たない子どもに対してジェンダー差を見出し，このジェンダー的な捉えかたが母親たちの付き合いを発展・抑制する基盤のひとつとなっている．

6.3　社交的なメンバーの存在

グループを形成し，維持していく上で大きな役割を担っているのが，メンバーの社交的な性格である [13]．とくに C（の社交性）がグループの形成・維持に果たした役割は極めて大きい．C 以外のメンバーが再三この点を強調し，自分たちを「C さんチーム」と呼ぶメンバーもいたくらいである．たとえば B・E へのインタビューにおいて私は，彼女たちとグループのソシオグラムを描く作業を行った（他のメンバーたちの意見も取り入れ，最終的に出来上がったのが，図 1 のソシオグラムである）．このとき，私は何気なく C を図の中心に置いた．これを見た B は「C さんを中心に書くのは正解です」と言って笑い，E も同じく笑った．彼女たちが C をグループの中枢と見なしていることを端的に示すエピソードだと思う．

図 1　グループを構成した小ユニット



A たちのグループは，バラバラだった小さなユニット 3 つ（図 1 の点線で囲んだ部分）から形成された．①はじめて出会ったときに連絡先を交換したという B・C・J と，その後でメンバーに入った D の 4 名のグループ．②A・C のペア．2007 年の夏には，A・C は連れ立って週 3 回というかなりのペースで Y を利用していた．③C・E という高校の同級生ペア. 偶然に近所のスーパーマーケットで再会し, C が E に Y に来るように勧めたという．以上から分かるように，3 つのユニット全てに入っている唯一のメンバーが C である．このことは，彼女がハブとなってグループが形成されていったことを意味している．時期的に言えば 2006 年の冬を境に，彼女たちは Y で出会うことが多くなって，バラバラだった小さなユニットがグループへと統合していった．A はこの様子を「ちっちゃい輪が，おっきな輪になった」と表現した．

興味深いことに，インタビューによると C 以外のメンバーは他のメンバーと親しくなることに消極的で，特別な努力をしていなかったようである．たとえば A は B との出会いについて，B が C と友達だったから仲良くなったのであって，「1 対 1 で仲良くなったわけで

はない」と語った（また B も，A との出会いについて同様の感想を述べた）．また B は E との出会いについて，「(E は）気がついたらいたんよ」，「だから，たぶん C さんを介して自然に，紹介された訳でもなくいつの間にかいたみたいな」と語り，E もこれに同意した[14]．つまり，C 以外のメンバーは共通の友達だった C を介して付き合いが生まれたのであって，彼女たち自身がお互いに声を掛けたのではないのである．もちろん，共通の友達を媒介として母親たちが親しくなっていくことは，子育て支援サークルで頻繁に見られることである（戸江 2009: 125-31）．だがこのグループの場合，ハブとしての C の役割が突出していた．

C がグループ化を推し進めた具体的なやりかたは，C は他の母親たちに対してお互いが知り合いだと再三主張するというものだった．たとえば E は B との出会いについて，C の口調を真似しながら，「(C から）『知ってるはずやから』,『知ってるはずやから』ってずーっと言われてて．『えっ知ってるかなあ』って（思った)」と語った．B もこれに同意し，やはり C の口調を真似しながら，「『知ってる』,『絶対知ってる』,『絶対知ってるって』って言われて．『知らんねんけどなあ』ってゆって，気づいたらもう一緒にいてたみたいな」と笑いながら語った．これら B・E の発言から，C にお互いを「知ってる」と言われた時点では，彼女たちがじっさいにはまだお互いを知らなかった可能性もあったといえる．また既に出会っていても，B・E が出会った 1 歳児タイムでは，同年齢の子どもをもつ母親がたくさん利用するから，その場にいた全ての母親を憶えることは難しい．ところが C は B・E にお互いが知り合いだと思い込ませ，もしくは C 自身が思い込むことによって自分を中心としたつながりに巻き込んでいった．

また C の社交性は，個々のメンバーとの出会いでも発揮された．たとえば C・E の再会がこの例である．C・E は高校の同級生でクラスも同じだったが，当時は別々の友達グループにいて，とくに親しくはなかった．ところが結婚・出産後，自宅近くのスーパーマーケットで偶然再会する．そのときに C が E に声を掛け，近所に子どもを遊ばせる場所がないと言う E に Y を紹介したという．C・E の付き合いはこうして始まった．E 自身は「C さんが『ここ』って言わへんかったら，たぶん来てなかったです」と語った．したがって C との再会と C の勧誘がなかったら，このグループに入ることもなかっただろう．

B・E は，出会いのエピソードを語ったときに C の口調を真似た．B・E は C の真似をすることで，C のようにお互いを「知ってる」と言ってつなげるようなふるまいをする母親がユニークであることを表現していると思う．子育て支援サークルで，よく知らない母親に声を掛けることは母親たちにとって負担となるし，それゆえに慎重になされることが少なくない．C・E の出会いのように街角で出会った場合は，さらに声を掛けることは難しくなる．C のバイタリティは他のメンバーから，この付き合いの初期負担を減らすことになった．多くのメンバーが自分たちの親しくなったプロセスを正確に憶えていない理由のひとつは，この負担が少なかったからかもしれない．C の社交性は，グループ化が進む上で大きな役割を果たしたのである．

6.4　母親どうしの相性

言うまでもなく母親たちの気が合うことは，彼女たちの関係が進展する上で重要なファクターである．A たち 5 名全員が，仲良くなった理由として気が合うこと，つまり相性を挙げた．彼女たちの気が合う理由は明らかに，他の 4 つの理由に由来する部分がある．これらについては個別に検討しているから，ここでは取り上げない．ここで検討する相性とは，子どもの齢・性別，社交的なメンバーがいたこと等から区別された，A たち自身の性格的な相性である．この意味で彼女たちの相性が良いことが分かる例として，次の 2 つを挙げることができる．

①既に述べたように，このグループの母親たちは子ども（・夫）抜きで遊びに出かけている．あくまでも母親として仲が良いだけなら，子どもを必要としない場面で連れ立って出かける必要はない．子どもを連れないで遊びに出かけていることから，彼女たちにとってお互いの関係が母親どうしの関係以上の意味をもっていることが分かる．②これも既に述べたが，彼女たちはかなり早い段階でお互いの連絡先を交換している．また B・C・J はこの後すぐに，お互いの家を順番に子ども連れで訪問し合う関係となっている．この急速な関係の進展を，C や他のメンバーの社交性だけに還元することはできない．なぜなら彼女たちは，グループのメンバー以外の母親とは連絡先を交換したことがなかったり，連絡先を交換していても遊びに出かけたりはしていないからである．このことは，彼女たちがお互いに特別に気の合う相手だったことを意味している．たとえば B は，出会った当日に C・J たちと連絡先を交換したことについて，笑いながらではあるが「奇跡的ですよね」とまで言った．

以上からも分かるように，A たち 5 名はお互いの関係を他の母親たちの関係とは質的に異なるものと捉えていた．たとえば B は，言葉を選ぶようにゆっくりと次のように語った．「今のあつまりっていうか，仲いい 5 人はなんか友達っていう感じで．自分の友達っていう感じで．近所の人は，子どもを介した友達．お付き合い」．B は明らかに親しさの違いから，グループの他のメンバーと近隣地域の母親たちを区別している．この B の発言を聞いて肯いていた E は，この 2 つの付き合いかたは「全然違う」ものだと言った．なぜなら近隣地域の母親の場合，「『あ，なんか，しゃべってるとちょっとしんどいなあ』」と思う人でも，他の母親たちと同じように付き合っている．それに対して A たちのグループの場合，「好きな人だけとずっといてるみたいな感じ」だという．つまり，近隣地域の母親との付き合いは負担となる場合もあるが，A たちのグループの付き合いでは負担がないという．

むしろ，A たちのグループのメンバーとの付き合いは，子どもを必要としない友達関係と言うべきものである．このことは，グループのメンバーは「自分の友達」（B）とか「好きな人」（E）といった表現から分かる．つまり，A たちの付き合いは子どもを介した形ではじまりながら，子どもを介した関係を超え出た関係となっている．彼女たちにとって既に母親というアイデンティティは，お互いの付き合いの基盤ではなくなっているのだ．彼女たちの関係の基盤となっているのはむしろ，彼女たち自身の交友つまり友達というアイ

デンティティである．B・E はグループのメンバーとは子どもがいない時期に出会っても，友達になっていただろうと語ったが，これは上の議論を裏づけるものである．たとえば「クラスで友達が見つかっていくみたいな感じで」（B）とか，「独身時代の友達みたいにしてとか」（E），「会社の先輩後輩やったとしても」（B）などと語った．つまり，学生時代・独身時代・会社員時代とどんな時期に出会っていても，親しくなった相手だったというのである．彼女たちの付き合いは確かに，子どもを介してはじまっている．だが彼女たちの関係は既に，必ずしも母親アイデンティティにもとづかない，お互いの相性を基盤とした交友となっている．

6.5　住まいどうしの距離

最後に，A たちの関係の発展を促進するファクターというよりも，関係の発展を阻害しうる特定のファクターがなかったということについて述べる．この特定のファクターとは，住まいがごく近い距離にあることである．

A たちのグループのメンバーは皆，Y まで徒歩で来られる場所に住んでいる．E だけが X 市から隣の市に転居したが，E もこのグループのメンバーと知り合った当時は Y から近い場所に住んでいた．A たち 5 名が週 1 回土曜日のあつまりを続けていく上で，地理的な近さは基本的な要素であるように思える．だが A たちは全く同じ地域ではなく，小学校区レベルで異なる地域に住んでいる．逆説的だが，お互いの住まいが適当に離れていることも打ち解けた関係になる上で有利に作用した，と何名かの母親（B・C・D）は語った．自宅近くの母親とは以後長期の関係が予想されるから，かえって気を遣ってしまい何でも話せる関係を築くことが難しいという．

たとえば C・D は，近所や公園で知り合った母親たちとはグループのメンバーと同じくらい親しくなることはないのか，という質問に対して否定的だった．その理由として D は，「一生付き合っていくわけやんか．『そこまで全部さらけ出しちゃっていいのかな』っていうのがある」からだと語った．C はこの意見に対して，自分たちは住んでいる地域が異なるからこの問題がないと語った．この点について，若干の推測を述べる．住まいが近く子どもの年齢も近い場合，幼稚園・小学校・中学校とお互いの子どもが通う学校が同じである期間が長くなることが予想でき，しかも同学年で必然的に付き合いが生じることが予想できる．確かに，だからこそ早いうちから親しくしておこうという考えかたもあるだろう．だが反面で，深く立ち入ってから関係がこじれてしまった場合は，付き合いを避けることが難しいがゆえに居心地が悪い状態に陥ってしまう危険がある．つまり，しがらみへ転化する危険が高いつながりなのである．グループのメンバーたちは，この後者の危険を避けるべく，同じ地域に住む他の母親たちとは必ずしも親しく付き合おうとしていない可能性がある．

これを傍証するのが，B・D のお互いの呼びかたである．グループのなかで B・D だけは同じ地域に住んでいる．既に述べたように，A たちのグループはお互いを「名前＋ちゃ

ん」で呼び合っているが，このなかでB・Dだけはお互いを「苗字＋さん」で呼び合っている．C をはじめとする他のメンバーたちは，B・D もお互いを「名前＋ちゃん」で呼べば良いのにと言い，それでも彼女たちが苗字で呼び合う理由を彼女たちが同じ地域に住んでいるからだろうと推測した（たとえばAは，B・Dから「やっぱり近所やから，苗字にしとくわ」と言われたという）．なぜならB・Dが住んでいる地域では，母親たちがお互いを「苗字＋さん」で呼び合っているからである．つまり，同じ地域の他の母親に対しては「苗字＋さん」で呼び合い，B・Dどうしだけ「名前＋ちゃん」で呼び合ったのでは，B・Dだけが特別に親しく見えてしまうから，これを避けていると考えられる（Aはこれを「そこだけ名前で呼んだらややこしい」と表現した）．つまり，同じ地区に住んでいることが，特別に親しい関係を築く上で足かせとなる場合があるといえる．

6.6　若干の考察

以上で述べた5つの理由は，子どもの都合によるものと母親たちの都合によるものに分けられる．子どもの齢（6.1節）・性別（6.2節）は前者，社交的なメンバーの存在（6.3節）・相性（6.4 節）・住まいの距離（6.5 節）は後者である．だが見てきたように，子どもの都合として語られたものにも，母親自身の都合が関連している場合が少なくなかった．たとえば，子どもの齢が近いと子どもどうしが遊んでいて楽しいという側面があるが，同時に母親どうしも話が合うというメリットがある．また同様に，子どもの性別が同じだと遊んでいて楽しいに違いないと母親たちは考えていたが，同時に子どもどうしのトラブルが生じた場合の対応が楽だという意味で母親たちもメリットがあった．

日本の子育てについては，母親の「子ども中心主義」が問題とされることが少なくない（落合 2004）．日本社会では「3 歳児神話」と揶揄されるがごとく，乳幼児期の発達・養育を重視する傾向が見られ，かつ養育の担い手として母親に期待する部分が極めて大きい．結果として母親は子どもを中心に据えた生活を送ることになって，大きな負担を強いられるというのである[15]．言うまでもなく，このことは育児不安の重要なファクターのひとつと考えられてきた．Aたちのグループのメンバーも，子育てを中心とした生活を送っていることは確かである．だが彼女たちが子どもの都合だけを尊重して行動しているとはいえない．なぜなら上で確認したように，一見子どものための都合だと思われることに，母親自身の都合が絡み合っているからである．これは個々の理由だけに限ったことではない．むしろ子育て支援サークルを利用すること自体が，子どものためだけではなく母親たちの楽しみにつながっている．6.4節で詳しく見たように，Aたち5名の付き合いは子どもとは関係なく，お互いの付き合いを楽しむ交友へと進展しているからである．

このことから，Aたちのグループのメンバーが，子どもが他のメンバーの子どもと会って楽しいことと自分たちが他のメンバーと会って楽しいことを区別していないことが分かる．しかも場合によると，母親の都合を優先させているように見える場合もある．たとえばCは，Yに出かけるときに「Y行ったら，○○（Aの子ども）おるで」と子どもに言っ

たら，子どもも行きたがると語った．この場面では，母親が子どもに声を掛けるに先立って，子どもはYに行きたいと言っていない．むしろ母親がYに行きたいがゆえに，子どももYに行きたくなるように仕向けているように思える．そして母親がYに行きたい理由は，他のメンバーと会えるからだろう．子どもの都合と母親の都合を区別していないことからは，「母子カプセル」のイメージが連想されるかもしれない．しかしAたちの付き合いに，この表現に付きまとう悲壮感は明らかにない．むしろ上で紹介したエピソードからは，自分が主導権を握って子どもを自分の交友に巻き込み，付き合わせるという「したたかさ」を感じ取ることができる．

7　グループ化していない母親たち

次に，グループ化していない常連利用者の母親たちについて若干の検討を行う．焦点は，次の2点である．①彼女たちにとって子育て支援サークルを利用することがどんな意義をもっているのか．これと関連して②他の母親たちとの付き合いはどんな意義をもっているのか．この2点である．改めてグループ化していない母親たちの基本的な情報を表4として掲げる．

表4　グループ化していない母親たちの基本的な情報

名前	年齢 1)	子どもの性別と年齢 1)	職業	幼保利用	実家	夫の職業
F2)	27歳 3)	息子（4歳）3)	パート	幼稚園	隣市	会社員
G2)	28歳 3)	娘（4歳）3)・娘（1歳）3)	パート	保育所	隣市	会社員
H	33歳	娘（3歳）	パート	なし	市内	会社員
I2)	38歳	息子（7歳）・息子（5歳）	パート	保育所	市内	会社員

1)　母親・子どもの年齢はインタビュー当時の年齢

2)　当時，利用者からスタッフになって活動していた

3)　数ヶ月単位で不正確な可能性がある

7.1　付き合いを限定する

同じ常連利用者でもFたち4名は，子育て支援サークルで出会う母親たちとの付き合いを，子育て支援サークルだけに限定していた．たとえばFはYで知り合った誰とも連絡を取っていない．Hも，Yで出会った母親たちとY以外で付き合うことはほとんどなく，道で見かけたら挨拶をするくらいの関係だと語った．またIも次のように語った．

私は，割とサッパリしてるのよ．（Yで出会った他の母親たちの）携帯のメールも全然

知らんとかいうパターン多かったよ．あんまり深入りせえへん．……向こうから聞かん限り，携帯（電話の番号）も教えへんしメール（アドレス）も言わへんし，「ワァー付き合おう」とかそういうんじゃないねん．

この 3 名が語った話は，積極的に子育て支援サークル以外での交友を発展させた A たちと対照的である．だが F たちも，A のグループのメンバーと同じかそれ以上に足繁く Y に通っていた．利用が長期間になるので時期にもよるが，F は週 1・2 回，G は週 2 回，I は週 2･3 回, H は週 3 回以上利用していた時期があった. 利用頻度が多いことにともなって，彼女たちは他の利用者やスタッフとも一定以上のコミュニケーションを取っている．たとえば G は Y を利用しはじめた頃，Y に溶け込むべく努力した様子を次のように述懐した．

そう，だから私（最初の）1 ヶ月か 2 ヶ月くらい必死やったからね，来るのんに．ここのスタッフの名前を憶え，利用者さんの名前を憶え，もう試練やんね（笑）　だから自分の居場所づくりのためって言うと，すごいオーバーなるけど，……自分自身を（ママ）なじむまでになんかすごくそこは疲れる作業でもある．

じっさい F・G・I の 3 名はスタッフから声を掛けられて，利用者からこの子育て支援サークルのスタッフになっている．このことは，彼女たちがスタッフにとって気心の知れた存在になっていたことを物語っている．彼女たちは，A たちと同等かそれ以上に Y の常連だったのである．

ここで次のような疑問が生じる．つまり，A たちのグループに比肩するような常連でありながら，なぜ F たちは A たちのように特定の母親と深く付き合っていないのか．さらに言うなら，次のような少々捻くれた疑問を提出することもできる．すなわち，かくまで頻繁に通ってなお深く付き合う母親がいない（見つからない）なら，F たちが Y を利用する意義はどこにあるのか．このような疑問である．

これらの疑問に対する解は極めてクリアである．つまり，F たちは自分から他の母親たちとの付き合いを制限し，深い付き合いになることを避けている．そして，母親との浅い付き合いを維持できることが，F たちにとって Y を利用し続けることの意義のひとつなのである．理由は大きく 2 つある．①浅い付き合いであっても，彼女たちの望むことが一定程度満たされているから. ②付き合いを制限することでむしろ, 守られる利得があるから．以上の 2 つである．はじめに①から検討する．F たちは，他の母親たちとの付き合いを Y に限定したとしても，主として情報的・情緒的サポートをある程度得ることができた [16)].

たとえば F・G・H は Y を利用することで子育ての情報が手に入ったと語った．これについて F は子どもの叱りかたを挙げた．F は，子どもの叱りかたについて育児書などでは書かれていないから，他の母親たちが子どもを叱っている様子を見て，叱りかたを学ぶことができたと語った．

他の母親たちと話すことは情報を得ると同時に，気持ちの上で楽になるという側面もある．たとえばGは次のように語った．

人が話をしているのを聞くのんでも，なんかちょっと違うことない？……まあ言うたら自分の1年後，2年後の姿の子どもらの苦労を聞けるから．「ああ，そんなんもあってんねやあ」とか……そんな話を聞くのんは別に私は好きなほうやから．だから別にそれを聞いてて，それでも気分転換にもなったし．

つまり，他の母親の話を聞くことが情報として意義があるだけでなく，気晴らしにもなっていたという．Gの場合はとくに，結婚によって他県からX市に転居してきたから，転居当時は近くに家族・親戚・友達はいなかった．また実母は「ほぼ放置」（G）で，叔母が時々電話を掛けてくるくらいだったから，夫以外に話をする相手がいなかった．そのなかで，Yで他の母親たちと話をすることは情緒面でも大きなサポートとなっていた[17]．

7.2　しがらみを避ける

次に，②付き合いを制限することでむしろ得られる利得について．付き合いを制限する母親たちは，子育て支援サークルでの他の母親たちとの付き合いを負担として捉えることが少なくなかった．Fはこのことをもっとも率直な形で語った．FがYを利用しはじめた頃，Yを利用している他の母親たちは30歳代が多く，当時20歳代なかばだった彼女から見て他の母親たちは怖く見えた．それでもYに通い続けていた理由について，Fは次のように語った．

はじめは本当に年上ばっかりだったから，なんかくつろぎに来るというより，勉強に来るというか．なんやろ挑戦に挑むではないけど，「ここで耐えられへんかったら，この子育てていかれへんわ」とか（笑）……頑張って来てる感じでしたね．うんうん．

FがYを利用していた理由は子育て支援サークル・「つどいの広場」が期待する育児不安の低減・解消や育児ネットワークの構築ではなかった[18]．驚くべきことにむしろ逆で，敢えて自分にとって負担になることを重々承知の上でYを利用していた．この負担とは，正に他の母親との付き合いから生じる負担である．Fは，以後予想される他の母親たちとの付き合いに向かって，比喩的に言えば「試練」としてYに通っていた．したがって，FがYで知り合った母親たちとY以外の場所で付き合おうとしないことは容易に首肯できる．Fは他の母親たちと一定の付き合いを必要だと考えているが，積極的にこの付き合いを広げたいと思っていない．こう考えた場合，行くといつでも他の母親がいることが期待できる子育て支援サークルは便利である．Fはこの点を公園と比べて語った．すなわち，Fの自宅近くにZ公園という大きな公園があって，11時頃からあつまっている母親グループに

何回か遭遇した．だが，会えたときに話をしても次に会ったときに憶えているとは限らないし，また次に会えるとも限らないから，継続的な付き合いへ進展することはなかったという．つまり公園と違って子育て支援サークルの場合，時間を合わせて出かけるといった面倒がない．この意味で母親たちは，付き合いに必要な負担を減らすことができる．同じようにGも，Z公園で母親たちがあつまっていることを知っていた．だが「自分としてはYがあるし，敢えて公園で友達を作ろうとは思わなかった」と語った．

同時に，公園であつまる母親たちとは浅い付き合いを維持するということが必ずしも容易ではなく，グループのメンバーか部外者かという二者択一を余儀なくされる場合がある．これも母親たちにとって負担に感じられることがある．たとえばFは，Z公園の母親たちがグループ化しているのかという質問に対して，「そんな感じがして，まず入りにくいんですよ（笑）」と答えた．子育て支援サークルは，この浅い付き合いを維持しやすくする．これについてIは次のように語った．

> だから○○（Yを運営するNPOの名前）がなかったら，もっときついんちゃうかなあとか思う．……もうそうなってくると，もうちょっとこう，……そういうコミュニケーションしっかり取って，色んな家こう渡り歩くみたいなコミュニケーションを．……いうようなやりかたで，自助努力で頑張るしかないやろうなあとか．うん．……うちらの場合，ここがあったからなあ．

「色んな家を渡り歩く」という表現から，Iが特定の母親（グループ）と深く付き合おうとしていないことがうかがえる．Iにとって子育て支援サークルは，この浅い付き合いを維持する「自助努力」を肩代わりしてくれるものとして意義をもっていた．つまりIもまた，他の母親たちとの付き合いを負担に感じている．

以上から分かるように，Fたちにとって付き合いを制限する意義とは，付き合いを維持する上で必要な負担・労力を軽減できるということである．理屈で言えば，この負担を最小にしたいなら，他の母親たちとの付き合いを一切絶ってしまえばよい．だがFたちも7.1節で見たような育児サポートは必要としている．母親たちがこれらのサポートを得るためには，浅く付き合うだけで十分である．ところがF・G・Iが口々に言ったように，浅く付き合うことは容易ではなく，正にこの距離を置いた付き合いを維持することが負担になるのである．この面で，いつでも他の母親がいることが一定程度期待できる子育て支援サークルは便利であった．Fたちが常連として利用を続けた理由は，ひとつにはこの点にあったと考えられる．

8　議論――ネットワークの密度の経験的意味

8.1　知見の整理と育児ネットワークの密度との比較検討

以上，9 名の子育て支援サークル常連利用者の母親たちのインタビューにもとづき，子育て支援サークルを舞台とした母親たちの付き合いについて検討してきた．最後に本節では，2 節・3 節で提示した先行研究からの課題と，本稿で進めてきた検討を突き合わせて，若干の議論を行う．だがこれに先立って，本稿で明らかにしてきたことを簡単に整理しておこう．

5 節・6 節では，子育て支援サークルで出会ってグループ化した母親たちについて検討した．5 節では，彼女たちが子育て支援サークルを利用する母親たちのなかで，例外的といえるくらい親しい関係を築いていることを説明した．とくに注目すべきは，①彼女たちが子どもを預ける関係になっていること，②彼女たちが子どもを預けて母親たちだけで遊びに出かける関係になっていること，この 2 点である．①は情報的・情緒的なサポートが中心となる子育て支援サークルの母親たちの関係から見て突出しているし，②は彼女たちが母親という立場を超えた友達関係を築いていることを端的に示している．

6 節では，彼女たちがとくに親しくなった理由を 5 点から説明した．①子どもの齢，②子どもの性別，③社交的なメンバーの存在，④母親どうしの相性，⑤住まいどうしの距離である．このうち，①・②は子どもの都合，③・④・⑤は母親の都合と分けられるように思えるが，じつは①・②についても母親たちの都合が絡み合っていることが明らかになった．この意味で彼女たちは自分と子どもを切り離していない．だがこのことは，母子密着といった悲壮なイメージのものではなく，むしろ母親たちが自分たちの交友に子どもを巻き込んでいくしたたかさを垣間見ることもあった．

これに対して 7 節では，グループ化していない常連利用者たちについて検討した．グループ化していない母親たちは，グループ化した母親たちと違って特定の母親たちと親しく付き合っていないし，彼女たちもこれを望んでいない．むしろ付き合いを制限することで，母親どうしの付き合いが負担となることを避けていた．なぜなら浅い付き合いであっても，他の母親たちと話をして子育ての情報を得て，気分転換をすることは可能だからである．ふつう一定の距離を置いて付き合うこと自体が負担となるが，子育て支援サークルを利用することで母親たちはこの負担を軽減していた．

2 節で立てた問題設定通り，A たち 5 名のグループは正に密なネットワークだったといえるし，F たち 4 名と他の利用者たちとの付き合いは疎なネットワークと表現できるものだった．その意味で本稿は，計量的な育児ネットワークのコンテクストで密度と表現されているものがどんな実態をもつかの一端を示すことができたといえる．

さらに重要と思えることは，5 節から 7 節の検討を通じて，密なネットワークに准じる A たち 5 名も，疎なネットワークに准じる F たち 4 名も，一定程度お互いの付き合いに満足しているように見えたことである（彼女たちが常連利用者として Y に通い続けているこ

とも，この主張を支持する）．中庸なネットワークの議論（松田 2008）に則るなら，A たちはもう少し浅く付き合うことで，F たちはもう少し深く付き合うことで，さらなる満足を得ることができるだろうか．だが，私はこの点について疑わしく思う．A たちはむしろ望んで親しい付き合いをし，F たちも注意して他の母親たちと距離を置いていたからである．

ここから，中庸なネットワークの「中庸」とは何か，という根本的な疑念が持ち上がってくる．確かに，全体的な傾向として「中程度の」密度のネットワークが望ましいと思う母親たちは多いかもしれない．だが，個別的な理由から密な関係・疎な関係を望む母親たちもまた存在する．母親たち自身がお互いの付き合いをどう捉えているかを個々に検討した場合，中程度が即，中庸とは言い切れない．本稿はこのことを例証するものであった．むしろ本人たちの捉えかたに即した場合，密な関係を中庸と呼ぶべき場合，逆に疎な関係を中庸と呼ぶべき場合もあるようにすら思える．では，①どんな付き合いの要素があるから，彼女たちは付き合いを中庸なものと思っているのか．また，②どんな背景から，彼女たちは当該付き合いかたを中庸だと思うのか．8.2 節では①について，8.3 節で②について若干の検討を行う．

8.2　親役割からの離脱・しがらみを避けた付き合いかた

付き合いを中庸なものにする要素を，A たち 5 名のグループと F たち 4 名について別々に検討する．はじめに前者から．2 節・3.1 節では育児ネットワークの主として計量的な諸研究を紹介し，そこから母親どうしの付き合いをめぐる問題を指摘した．つまり，母親どうしの付き合いはストレスといったネガティブな効果を生む場合があるということである．そしてこのネガティブな効果は，母親の付き合いが子どもを介したものである場合に，とくに大きいことが懸念される（前田 2004a）．前田（2004a: 29）は上の問題への対策として，母親が親役割を離れるチャンスを増やすことが重要だと述べ，たとえば一時保育の推進を唱えていた．

この主張に異議はないが，A たち 5 名の付き合いは，子どもを介して知り合った親どうしであっても，親役割からの離脱が可能だということを示唆している．5 節・6 節で検討したように，A たちは親役割から離れて自分本位の友達関係を築いているからである．このことが，彼女たちがお互いの付き合いを居心地の良いものと捉える，もっとも大きな要素だといえるだろう．

これに対して F たち 4 名は，他の利用者たちとのつながりがしがらみに転化しないように注意しながら付き合っていた．子育て支援サークルという場所を，他の母親たちと浅い付き合いを繋ぎ止める場所として利用していたのである．そして，この浅い付き合いから F たちは，子育ての情報を得，気晴らしとなる会話をし，子どもの遊び相手を見つけていた．つまり，情報的サポート（子育ての情報）・情緒的サポート（他の母親たちとの会話），そして実体的サポートに近いもの（子どもを遊ばせる）を得ることができるのである．F

たちにとって，子育て支援サークル内限定で他の母親たちと弱いつながりを維持することが，居心地の良い付き合いかただといえる．

以上で見たように，A たちのグループと F たちとでは，（少なくとも Y における）他の母親たちとの付き合いに求めるものが大きく異なっている．もちろん，上で検討したことは諸々の要素の一部に過ぎない．だが，両者の対照的な中庸な付き合いかたが，これらの点に由来する部分は大きいといえる[19]．

8.3　付き合いかたを左右するもの——付き合いの履歴と選好

最後に，A たちのグループが望ましいと思う付き合いかたと，F たちが望ましいと思う付き合いかたの違いを生んだ背景的要素について検討し，本稿を閉じたい．定石といえる道筋は，彼女たちの社会的立場に目を向けるというものだろう．たとえば A たちのグループは専業主婦指向が強く，対する F たちはパートに出ていることに注目することができる．つまり F たちの場合，子どもを介した母親どうしの付き合い以外にも，他で諸々の付き合いを得るチャンスがあるから，深く母親たちのつながりにコミットする必要がないと予想を立てることもできる．

だが，この予想にはいくつかの欠陥がある．①A たちのグループの中心ともいえる C が，（グループが成立してからだが）週 5 日という頻度でパートに出ている．②パートをしている母親のうち，F・G は子育て支援サークルでのパートで，H は在宅でのパートである．したがって付き合う相手は利用者として Y に通っている時期と大きく異ならないか(F･G)，付き合う相手が限られている（H）．また，結婚等で遠くから転入してきた母親の場合，近くに家族・親族・友達がいないから母親どうしの付き合いに重点が置かれる傾向があるとも予想される．だがこれについても，他県出身の G は同じく他県出身の D と違って，他の母親と必ずしも深い付き合いをしているとはいえない．

もちろん以上の簡単な検討だけで，母親の社会的立場から A たちと F たちの違いを説明できないと決めつけることはできない．だが以下では，少し別の切り口からこの違いについて検討してみたい．その切り口とは，母親たちは長い年月をかけて自分にとって望ましい付き合いかたを身につけてきた，という点に注目するものである．なぜなら母親たちの付き合いかたの違いは，何も母親になってから急に生じた違いではなく，学生時代・独身時代を通じて培われてきた性向だと思えるからだ．たとえば母親どうし・クラスメイトのような同輩と親しく付き合うのではなく，趣味のつながりで深く，広い交友関係を築いてきた母親がいる．I は昔からマンガオタクで高校時代もマンガ同好会で活動し，夏休みなどを利用して作品を制作し，コミックマーケットにも 4・5 回出かけたという．このサークル活動を通じて I は，高校生にして大学生や社会人と交友をもっていた．

だいたい（付き合っていたのは）大学生ぐらいで．年上と付き合ってるほうがねえ，（I が）18 ぐらいの（とき）さあ，（向こうが）25 とか 30 ぐらいの人やったら，おごっ

てもらえるし，遊ぶとこ教えてもらえるし……金ももってるし．ええ男とは縁なかったけどな（笑）

このエピソードは，I がマンガという共通の趣味を通じて，高校時代に既に異性をふくめた年上の人たちと親しい付き合いをしていたことを如実に物語っている．また母親になる以前から，深い友達付き合い自体を積極的に望んでいないと思える場合もあった．F は妊娠しているときの友達付き合いについて，次のように語った．

ぜんぜん友達いなかったです．（「え，じゃあ，むしろ妊娠中のほうがたいへんなんですか？」という質問に対して）それは別に友達がいないことは，たいへんじゃないよね？（横にいた G に向かって）……子どもがまだいないから，まだ自分だけの問題じゃないじゃないですか．だからあんまり友達がほしいとも思わなかった．

F にとって母親どうしの友達付き合いとは，第 1 に子どもの遊び相手を見つけることだった．したがって自分だけの問題であるなら，積極的に友達が必要だと感じなかったというのである．このことから，F はたとえば学生時代も，積極的に交友関係を築いていくタイプではなかったと推測できる．

これに対して A たちのグループのメンバーは，学生時代・独身時代を通じて積極的な友達付き合いを望んできたと推測できる．既に母親になった後ではあるが，C の次のエピソードはこのことを傍証していると思う．このエピソードは，C がある母親と付き合いはじめたきっかけにかんするものである．C は子どもの 4 ヶ月健診に出向くバスのなかで，既に 2 回見かけたことがある母親と出会った．バスのなかで，C とこの母親は隣り合った場所に座った．そこで C は「3 回も会ったから，とりあえずしゃべらなと思って」声を掛けたという．C はこの母親と連れ立って健診から帰る道すがら，バス停で自宅の場所（バス停の近く）を教えた．さらに C は，近く別の母親が自宅にやってくる予定があると伝え，この母親にも来ないかと誘ったという．じっさい待ち合わせの日にこの母親は姿を現し，ここから彼女たちの付き合いがはじまった[20]．C の意見では，3 回も顔を合わせていながら声を掛けないことがむしろ不自然だという．だが知り合ったばかりの相手に自宅の場所を教え，さらに自宅に来るように誘うことは，極めて例外的だといえるだろう．このエピソードからはCがいとも楽々と友達付き合いを広げていく様子をうかがい知ることができる．そして C のこの考えかたは，母親になってから急に身につけたものではないと考えるのが自然だろう．

以上の検討を踏まえるなら，他の母親たちとの付き合いにかんする選好は，母親たちのそれまでの付き合いの「履歴」とでも言うべきものと深く関係しているといえる．つまり付き合いかたの選好は，子ども時分から長じて母親となるまでの長くて多様な友達付き合いの歴史を通じて，次第に身につけられてきたものであるように思えるのだ．したがって

密度が中程度なネットワークが，一律に母親たちにとって居心地が良く望ましいネットワークとは言い切れないだろう．個別具体的な母親たちにとってどんなネットワークが望ましいかを検討する上では，場合によっては母親となる以前に遡って彼女たちの付き合いの来歴・選好を調べ，これらと突き合わせることが一定の意義をもつように思える．本稿は，9 名の母親へのインタビューの検討を通じて，この意義を示唆するという側面をもつものであった．

［注］

1) 「つどいの広場」は，2002 年に創設され，2010 年時点で全国 1,527 ヶ所を数える．また 2009 年 4 月に，「つどいの広場」は児童福祉法上の位置づけを与えられた．
2) もっとも，「つどいの広場」を子育て支援を唯一の目的とした施策と捉えることは早計である．たとえば，商店街の空き店舗が防犯上の問題と認識されている．「つどいの広場」創設に当たって，「つどいの広場」がこれら空き店舗に入ることで，防犯上の効果を期待するという側面もあった．
3) もっとも，松田（2008）が扱うネットワークは世帯外ネットワークなので，同居している家族（たとえば夫・夫婦の両親）はネットワークのメンバーに入っていないことに留意が必要である．つまり，ネットワークのメンバーが 0 名であっても，同居家族から十分なサポートを得ている場合もあるだろう．
4) 但し品川（2004, 2005）の主眼はむしろ，一見ネガティブな現象と思える子育てサークルの解消を，母親たちがポジティブなものと受け止めていることに置かれている．この点は特記しておく．
5) 注目すべき近年の傾向としては，ティーン・エイジャーの母親の利用が増えていて，スタッフたちもこの点について少なからぬ注意を払っている（11.04.24 のフィールドノーツ）．
6) この点で A・B・C・D・E の 5 名は，同じ常連利用者でもパートに出ている残りのインタビュイーと，大きく異なるように見えるかもしれない．しかし F・G・H・I たち 4 名も子育て支援サークルを利用しはじめた時点では，必ずしもパートをしていなかった．したがって職業的な面で，利用開始当時から利用様態に違いがあったと捉えることは早計である．
7) また彼女たちが，自分たちの付き合いを説明するなかで，児童虐待に言及したことは興味深い．本文にある引用の直後，D が「その，虐待とかあるやん」と言いかけると，C は「あれは，ぜったい友達おらへんなあ」と発言した．D はこれに同意し，さらに「ストレス発散するところがないから，子どもにやってしまう」と語った．彼女たちがここで，「友達がいない - ストレスを発散できない - 子どもを虐待する」という推論をしていることが分かる．逆に言えば，友達がいる自分たちはストレスを発散できており，子どもを虐待する可能性がないということでもあるかもしれない．その意

味で，これらの発言も彼女たちがお互いの関係の意義について語ったものと理解できる．なお，ここで言う「ストレス」とは，あくまでも彼女たちが用いる人口に膾炙した意味であって，家族社会学の専門的な議論とは別次元のものである．念のために付言する．

8) このことは，業務終了後のスタッフ・ミーティングで議題に上がることもある．なぜなら，スタッフは利用者たちがグループ化することで，他の利用者（とくに新規利用者）が居づらくなることを懸念しているからである．じっさい，ある常連利用者は，グループ化した母親たちがいる時間帯の利用を控えていると語ったという（09.09.26 のフィールドノーツ）．

9) このグループのメンバーに限らず，子育て支援サークルを利用する理由として，自分の子どもと近い齢の子ども・その母親に出会えることを挙げる母親は多い（渡辺編 2006a）．子育て支援サークルも，子どもの年齢別の日・時間帯を設けるなどして，この期待に応えたアレンジを行っている．

10) このグループのメンバーの子どもどうしでも，C・D の子どもたちと J の子ども以上に月齢が離れている場合もある．具体的に言うと，E の子どもの年齢は，他のメンバーの子どもで一番年長の A の子どもと 12 ヶ月以上の差がある．この差があるにもかかわらず，E がメンバーとなっている理由は，E がこのグループの要である C と親しかったことが深く関係している（この点については 6.3 節で述べる）．6.2 節以下で検討するように，このメンバーが親しくなった理由を子どもの齢が近いことだけに還元できないことは言うまでもない．

11) この点について私は，会話分析の手法で検討したことがある（戸江 2009）．

12) 母親どうしの年齢が近いほうが良いかどうかは意見が分かれた．これは 6.4 節の相性の話とも関係するが，母親の年齢も近いほうが良いとする母親たちは，年齢が近いほうが，話が合うと言った．

13) ここで社交性というのは，他人に気軽に声を掛けることができるというほどの意味である．

14) A と E の出会いについても，C が大きな役割を果たした可能性がある．A と E は，はじめて顔を合わせた別の子育てサロンでは「他人行儀」だったが，Y で C が共通の友達だと分かってから，親しくなっていったという．

15) もっとも，多少形は異なるにしても，母親による「集中的な育児（intensive mothering）」が西洋社会でも見られることは言うまでもない（Hays 1996）．

16) さらに言うなら，実質的なサポートに近いものも得ているといえるかもしれない．Y に来ると，子どもを他の子どもと遊ばせることができる．したがって母親単独で子どもの遊び相手を務める場合に比べ，世話が楽になっていることも少なくないように思える．もっとも，このことは他の母親との付き合いというよりも，スタッフがいることに由来する部分も少なくないだろう．

17) なお他の母親たちと話をする環境をセットアップする意味で，Y がティータイムを設けていることの意義は大きいようだ．たとえば H は，Y を保育所の園庭開放と比べながら「あれがあるとないでは，だいぶ違うんじゃないですか」と語った．

18) 但し F・G の 2 名は，当時の利用者のなかで珍しく年齢が近かったことや，後に同僚スタッフとして働くことになったことから比較的付き合いが深い．

19) 子育て支援サークルの側から見た場合，子育て支援サークルは，母親たちに深い付き合いをする相手を見つけるチャンスを提供すると同時に，浅い付き合いを維持することも可能にしているということがいえる．

20) なお，この一連の場面に B・J も居合わせていた可能性がある．但し，この点にかんする C の記憶は曖昧な部分があるから確実とはいえない．

［文献］

Emerson, R. M., R. I. Fretz, and L. L. Shaw, 1995, *Writing Ethnographic Fieldnotes*, Chicago: The University of Chicago Press.（＝1998，佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳『方法としてのフィールドノート――現地取材から物語作成まで』新曜社.）

原田正文, 2002,『子育て支援と NPO――親を運転席に！ 支援職は助手席に！』朱鷺書房.

――――, 2006,『子育ての変貌と次世代育成支援――兵庫レポートにみる子育て現場と子ども児童虐待予防』名古屋大学出版会.

Hays, S., 1996, *The Cultural Contradictions of Motherhood*, New Haven: Yale University Press.

池田隆英，2009,「日本の『育児不安』に関する計量的研究の動向と課題」『精華女子短大研究紀要』35: 25-52.

柏木惠子，2008,『子どもが育つ条件――家族心理学から考える』岩波書店.

Lofland, J., and L. H. Lofland, 1995, *Analysing Social Settings: A Guide to Qualitative Observation and Analysis*, 3rd ed., Belmont: Wadsworth Publishing.（＝1997，進藤雄三・宝月誠訳『社会状況の分析――質的観察と分析の方法』恒星社厚生閣.）

前田尚子, 2003,「育児期女性におけるパーソナル・ネットワークの構造効果――サポート・ストレス・関係充足度」『家族関係学』22: 33-44.

――――, 2004a,「パーソナル・ネットワークの構造がサポートとストレーンに及ぼす効果――育児期女性の場合」『家族社会学研究』16(1): 21-31.

――――, 2004b,「育児期女性におけるパーソナル・ネットワークの構造とディストレス――子どもの状態による差異」『家族研究年報』29: 41-52.

牧野カツコ, 1982,「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所紀要』3: 34-56.

――――, 2009,「子育ての場という家族幻想――近代家族における子育て機能の衰退」『家族社会学研究』21(1): 7-16.

松田茂樹, 2001,「育児ネットワークの構造と母親の Well-Being」『社会学評論』52(1): 33-49.

――――, 2008,『何が育児を支えるのか――中庸なネットワークの強さ』勁草書房.

落合恵美子，1989,「育児援助と育児ネットワーク」『家族研究』兵庫県家庭問題研究所，1:109-33.
————，1993,「家族の社会的ネットワークと人口学的世代——60 年代と 80 年代の比較から」蓮見音彦・奥田道大編『21 世紀日本のネオ・コミュニティ』東京大学出版会，101-30.
————, 2004,『21 世紀家族へ——家族の戦後体制の見かた・超えかた 第 3 版』有斐閣.
大豆生田啓友，2006,『支え合い，育ち合いの子育て支援——保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論』関東学院大学出版会.
清水美知子，2008,「育ち合いの子育て支援活動——親子ひろば『はらっぱ』を事例として」『関西国際大学研究紀要』9: 109-25.
品川ひろみ，2004,「子育てサークルの解散要因に関する研究——活動の経緯と成員の意識に注目して」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』93: 197-223.
————, 2005,「成員からみた子育てサークルの解散——サークルの誕生から解散後まで」『子ども社会研究』11: 45-60.
住田正樹・溝田めぐみ，2000,「母親の育児不安と育児サークル」『九州大学大学院教育学研究紀要』46(3): 23-43.
寺田恭子，2005,「子育て支援サークルから子育てコミュニティ創出に向けての課題——子育てサークル調査をふまえて」『子ども社会研究』11: 61-74.
戸江哲理，2009,「乳幼児をもつ母親どうしの関係性のやりくり——子育て支援サークルにおける会話の分析から」『フォーラム現代社会学』8: 120-34.
渡辺顕一郎編，2006a,『拠点型地域子育て支援におけるプログラム活動のあり方に関する研究』2005 年度児童関連サービス調査研究等事業報告書，子ども未来財団.
————編, 2006b,『地域で子育て——地域全体で子育て家庭を支えるために』川島書店.
山根真理，2000,「育児不安と家族の危機」清水新二編『家族問題——危機と存続』ミネルヴァ書房，21-40.
矢澤澄子・国広陽子・天童睦子，2003,『都市環境と子育て——少子化・ジェンダー・シティズンシップ』勁草書房.

［付記］　インタビュー調査に協力して頂いた子育て支援サークルの利用者のみなさんに厚くお礼を申し上げます．また，インタビュー時に部屋を提供してくださったスタッフのみなさんにもお礼を申し上げます．なお本稿は，日本子ども社会学会第 16 回大会での報告「乳幼児をもつ母親どうしのつながり——子育て支援サークルでの関係性の生成と維持」（2009 年 7 月 4 日・中国学園大学）を全面的に改稿したものです．報告時に青井倫子氏・林鎮子氏・大島志津子氏から貴重なコメントを頂きました．またグローバル COE 成果報告会では，伊藤公雄氏・落合恵美子氏・押川文子氏から重要な指摘を頂きました．さらに，本ワーキングペーパーの査読者からも有益なコメントを頂きました．コメントを寄せて頂

いたみなさんに感謝します. 但し, 本稿のいかなる瑕疵も戸江がその責任を負うものです.

2010 年度次世代研究「日本の子育て支援サークルにおけるコミュニケーションとネットワーク」（研究代表：戸江哲理）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2010 年度プロジェクト時点

戸江 哲理 （京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）